

相対的貧困が小学生・中学生及びその保護者に与える 影響に関する一考察

梅 本 貴 豊
矢 野 裕 俊
梶 川 裕 司

〈Summary〉

Poverty has become a significant issue for children's education in Japan. In order to better understand the real picture of poverty groups, a detailed analysis matching the data of parents and their children is necessary. Therefore, this research matched the data of parents and their children from Grade 5 to Grade 8, in order to study relative poverty. For the purpose of the study, the data was divided into 3 categories: a relatively poor group, a relatively low-income group, and a relatively high-income group. The result of the analysis showed different characteristics for each group. For example, in the relatively low and relatively high-income groups, the parents' desire for higher education corresponded with the children's desire. However, this kind of correspondence was not seen in the relatively poor group. Moreover, upon studying the connection between the children's self-affirmation, learning comprehension, and studying time, almost no significant association was found amongst these criteria in the relatively poor group. Finally, this paper discusses factors regarding the actual situation of the relatively poor group in light of these different results between each group.

1. 問 題

近年、わが国では子どもの貧困と、それがもたらす社会的格差が大きな問題になっている。この問題の実態把握を初めて行った自治体が沖縄県であり、その「沖縄県子どもの貧困実態調査」は各自治体に大きな影響を与えた（沖縄県 2015）。その結果、子どもの貧困の実態を捉えるための自治体による多数の調査がおこなわれるようになった。その特徴として、沖縄県調査が県単体ではなく大学研究者の協力を得て行われたものであることを継承し、自治体と当該地域の大学との連携で調査が行われていることがあげられる。その例として北海道庁と北海道大学の研究班が共同し、道内の子どもの貧困の現状についての調査がある（北海道 2017）。この調査では、小学 2 年生、小学 5 年生、中学 2 年生、高校 2 年生の保護者および小学 5 年生、中学 2 年生、高校 2 年生子どもを対象とした調査をおこなっている。また京都府は、京都府立大学京都政策研究センターとの連携で「京都府子どもの貧困対策の推進に係る調査研究」を行った（京都府 2017）。この研究では、関係機関と自治体に対するヒアリングを実施し、その結果を集約している。また大

大阪府は、府福祉部子ども室子育て支援課推進グループと大阪府立大学との連携で「子どもの生活に関する実態調査」を行った（大阪府 2017）。この研究では大阪府下の市町村住民から無作為抽出を行い小学校 5 年生と中学校 2 年生及びその保護者を対象に質問紙調査を行っている。

また兵庫県では、各市が独自に調査を行っている事例がみられる。例えば、西宮市は、子ども支援局子育て支援部子供家庭支援課が「西宮市子育て世帯の経済状況と生活実態に関する調査」を行っている（西宮市 2017）。この調査では、西宮市在住の小学校 5 年生と中学校 2 年生及びその保護者に対してサンプリングによる質問紙調査を行っている。また川西市は健康福祉部生活支援室と教育委員会事務局の合同で「川西市子どもの生活に関するアンケート調査」を行った（川西市 2018）。この調査では川西市の小学校 5 年生と中学校 2 年生及びその保護者を対象としてサンプリングによる質問紙調査を行っている。ただし両調査とも市独自の調査であることが特徴である。

これらの調査は子どもの貧困に関して有益なデータを提供してくれている。特に内閣府が「子どもの貧困対策の推進に関する法律」に基づき「実態調査の調査項目の具体的事例」を示したことにより、質問項目の標準化が図られ、その効果として同一質問項目の回答傾向の比較を行うことができるようになった。そのため当該地域が他地域の結果を参照することによって当該地域の特徴を、より客観的に把握することができるようになった。しかし反面、各自治体が「実態調査の調査項目の具体的事例」を利用するようになった結果、調査項目が多数になり、被験者への負担の増大と、膨大な分析の必要をもたらすこととなった。

このような状況の中、論者らは、兵庫県尼崎市の子どもの生活実態把握に関する調査（以下「尼崎調査」）に参加する機会を得た。前述の西宮市、川西市が市の部局単独で調査を行っているのに対し「尼崎調査」は都道府県レベルの調査と同様に、尼崎市と武庫川女子大学との連携で行われ、京都外国語大学の教員も参加した取組みである。この結果は、すでに「尼崎市子どもの生活に関する実態調査結果報告書」として公表されている（尼崎市 2018）。論者らは、結果分析の段階で、さらに分析を行うことで子どもの貧困問題のより詳細な実態が明らかになると感じつつ、それらの分析結果を報告書にすべて記載すれば、大部の報告書となる上に、市民に提供すべき基礎資料を超えた研究報告書になりかねないという理由から、他の自治体の報告潮にならない、全項目の基本集計及び相対的貧困層とそれ以外に区分したクロス集計表そしてその分析の文章を掲載することとした。

しかし「尼崎調査」では、調査計画の段階から調査に参加できたため、さらに進んだ分析のため柔軟性を持ったデータ蓄積を行うことを提言し、実現している。これまでの先行する調査では、相対的貧困層とそれ以外あるいは全対象との比較で分析をおこなっている例が多い。しかし今回のデータ蓄積からは、さらに経済状況を細分化した分析を可能としている。「尼崎調査」データの分析の際、相対的貧困層とその他の区分に加え、その他をさらに分化した 3 群でデータを分析することでより相対的貧困層の課題が浮かび上がる可能性があるとの意見があった。そこで本研究ではその観点を取り入れ、相対的貧困層と相対的低所得層、相対的高所得層の 3 層に分けた分

析を行う。さらに「尼崎調査」のデータは、小学生、中学生とその保護者のデータを完全にマッチングできる状態でデータが蓄積されている。そこで本研究ではこのデータを子どもと保護者の関係という観点からの分析を行う。

2. 方法

2.1. 調査対象および調査方式について

今回のデータは「尼崎調査」から得られたものである。調査結果の全容は、前述の報告書に記載しているが、ここでは以降の分析に必要な点のみについて記述する。対象は、尼崎市立小学校5年生とその保護者、市立中学校2年生とその保護者、全員を対象として行われた。調査方式は、各学校を通じて児童生徒が調査票を持ち帰り、記入後、各家庭が返信用封筒を使って郵送で市役所に回答する方式であった。また、無記名方式であった。

2.2. 分析対象

「尼崎調査」で回答が得られたのは、小学5年生 1521名と小学5年生保護者 1522名（親子 1519ペア）、中学2年生 1087名と中学2年生保護者 1089名（親子 1087ペア）である。本研究では、以下の観点で「尼崎調査」の全データから分析対象を抽出した。①家庭の経済状況（収入金額）に回答のあった保護者、②①のうち、保護者と子どもが完全にマッチングされているケース、③②のうち、子どもの小学校・中学校別が明確なケースである。この過程で 2327ペアが抽出され、これらケースについて「結果」に示した分析をおこなった。

2.3. 調査内容

今回の調査では、保護者に対して、「回答者の属性」「保護者とその家族」「保護者の状況と子どもとの関り」「子どもへの期待と関心」「保護者自身のこと」「家庭の経済状況」について回答を求めた。子どもに対しては、「普段の生活」「家族との関係」「学校生活と学業」「学校での楽しみと放課後」「楽しいとき」「持っているもの」「習い事」「心配ごと・悩み・希望する学歴」「自己肯定感」について回答を求めた。本研究では、以上のなかから検討する目的に応じて質問項目をピックアップして分析を行った。詳細な項目の内容および回答形式等は、尼崎市（2018）の「尼崎市子どもの生活に関する実態調査報告書」を参照のこと。

2.4. 相対的貧困に関する分析の観点

「尼崎調査」では相対的貧困層とそれ以外という2区分で、その相違を検討した。本研究では、相対的貧困層の特徴をさらに明確化するため、以下の3区分をもとに分析を行うこととした。

まず、相対的貧困層以外の各世帯人数において、小学生保護者と中学生保護者別に「家庭の経済状況」の中央値を算出した（表1）。そして、便宜的にこれらの値よりも下を相対的低所得層に、これらの値以上を相対的高所得層に分類した。

表1 相対的貧困層以外の各世帯の経済状況中央値

世帯人数	小学生	中学生
2人	400～450万円未満	400～450万円未満
3人	600～650万円未満	450～500万円未満
4人	600～650万円未満	600～650万円未満
5人	600～650万円未満	650～700万円未満
6人	550～600万円未満	650～700万円未満
7人	600～650万円未満	700～750万円未満
8人	650～700万円未満	—
9人	—	—

小学生保護者と中学生保護者別に、今回の調査におけるそれぞれの層の人数を表2に示した。また、本研究ではペアデータを扱っているため、子どものデータも表2の保護者の人数と対応するものである。「結果」では、各層に分けて分析を行っていく。なお、それぞれの質問項目への回答には欠損値がみられたため、各分析においてペアワイズ処理を行った。ペアワイズ処理は、特定の分析に用いる変数においてデータに欠損値が見られた際、その分析にのみ、そのデータを用いないという欠損値の処理方法である。すなわち、欠損値が見られない変数を分析に用いる場合は、そのデータも使用することとなる。ペアワイズ処理により、可能な限り多くのデータを分析に用いることができるというメリットがあるため本研究ではこの方法を採用した。

表2 校種別の各層の人数

	小学生	中学生	計
相対的貧困層	123	109	232
相対的低所得層	538	387	925
相対的高所得層	701	469	1170
計	1362	965	2327

3. 結果

3.1. 保護者の回答と子どもの回答との対応

保護者と子どもに共通の質問項目を取り上げ、それらの対応について質的変数、特に名義尺度間の関連及び相違を検討するために用いる分析手法であるカイ二乗検定および順位相関によって分析を行った。各質問項目について層別に検討し、それぞれにおいて対応がみられるかどうか注目した。

1) 保護者の「子どもへの期待と関心」と小学生の「希望する学歴」との対応

保護者の進学先に関する子どもへの期待と、小学生の希望する学歴との関連について検討を行った。相対的貧困層では、進学先の希望について保護者と小学生との回答に関連はみられなかった ($\chi^2(24) = 27.72, n.s., V = .24$)。クロス集計表を表3に示した。

表3 相対的貧困層における保護者の進学先に関する子どもへの期待と小学生の希望する学歴の回答のクロス集計表

		小学生						合計
		中学校	高校	大学・短大	大学院	専門学校	考えたことがない	
保護者	中学校	0	0	0	0	0	0	0
	高校	2	15	6	0	4	2	3
	短大・高専	0	1	1	0	1	0	0
	大学	0	6	21	2	6	10	3
	大学院	0	0	0	0	0	0	0
	専門学校	0	1	2	1	8	3	3
	わからない	1	3	4	1	3	3	4
合計		3	26	34	4	22	18	13

相対的低所得層では、進学先の希望について保護者と小学生との回答に関連がみられた ($\chi^2(30) = 94.27, p < .001, V = .19$)。残差分析において有意にセルの値が大きかった部分を、イタリックおよびボールドとした (表4)。表から、親と子どものおおよその進学希望が対応していることがわかる。

表4 相対的低所得層における保護者の進学先に関する子どもへの期待と小学生の希望する学歴の回答のクロス集計表

		小学生						合計
		中学校	高校	大学・短大	大学院	専門学校	考えたことがない	
保護者	中学校	0	0	0	0	0	0	0
	高校	4	26	12	0	9	13	10
	短大・高専	0	5	15	0	6	7	4
	大学	1	21	143	16	30	49	29
	大学院	0	0	1	1	0	0	0
	専門学校	0	12	10	2	20	6	5
	わからない	1	10	12	4	9	8	10
合計		6	74	193	23	74	83	58

相対的高所得層では、進学先の希望について保護者と小学生との回答に関連がみられた ($\chi^2(36) = 153.52, p < .001, V = .19$)。残差分析において有意にセルの値が大きかった部分を、イタリックおよびボールドとした (表5)。表から、親と子どものおおよその進学希望が対応していることがわかる。

表5 相対的高所得層における保護者の進学先に関する子どもへの期待と小学生の希望する学歴の回答のクロス集計表

		小学生							合計
		中学校	高校	大学・短大	大学院	専門学校	考えたことがない	わからない	
保護者	中学校	0	0	3	0	0	0	1	4
	高校	1	13	6	0	11	2	6	39
	短大・高専	0	4	8	0	5	3	1	21
	大学	3	41	261	35	45	71	48	504
	大学院	0	0	5	8	0	2	3	18
	専門学校	0	5	11	1	19	2	2	40
	わからない	0	6	14	1	5	22	7	55
合計	4	69	308	45	85	102	68	681	

2) 保護者の「子どもへの期待と関心」と中学生の「希望する学歴」との対応

保護者の進学先に関する子どもへの期待と、中学生の希望する学歴との関連について検討を行った。相対的貧困層では、進学先の希望について保護者と中学生との回答に関連はみられなかった ($\chi^2(25) = 36.99, n.s., V = .27$)。クロス集計表を表6に示した。

表6 相対的貧困層における保護者の進学先に関する子どもへの期待と中学生の希望する学歴の回答のクロス集計表

		中学生							合計
		中学校	高校	大学・短大	大学院	専門学校	考えたことがない	わからない	
保護者	中学校	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校	0	21	1	2	4	1	3	32
	短大・高専	0	1	2	0	0	1	1	5
	大学	0	5	25	0	7	4	7	48
	大学院	0	0	1	0	0	0	0	1
	専門学校	0	3	0	0	4	2	1	10
	わからない	0	0	2	1	2	0	1	6
合計	0	30	31	3	17	8	13	102	

相対的低所得層では、進学先の希望について保護者と中学生との回答に関連がみられた ($\chi^2(25) = 185.67, p < .001, V = .32$)。残差分析において有意にセルの値が大きかった部分を、イタリックおよびボールドとした(表7)。表から、親と子どものおおよその進学希望が対応していることがわかる。

表7 相対的低所得層における保護者の進学先に関する子どもへの期待と中学生の希望する学歴の回答のクロス集計表

		中学生							合計
		中学校	高校	大学・短大	大学院	専門学校	考えたことがない	わからない	
保護者	中学校	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校	0	44	14	1	14	6	13	92
	短大・高専	0	6	11	0	9	5	0	31
	大学	0	11	114	7	9	17	11	169
	大学院	0	0	0	2	0	0	0	2
	専門学校	0	9	10	1	20	0	7	47
	わからない	0	4	4	0	3	3	9	23
	合計	0	74	153	11	55	31	40	364

相対的高所得層では、進学の希望について保護者と中学生との回答に関連がみられた ($\chi^2(30) = 207.62, p < .001, V = .31$)。残差分析において有意にセルの値が大きかった部分を、イタリックおよびボールドとした(表8)。表から、親と子どもとのおおよその進学希望が対応していることがわかる。

表8 相対的高所得層における保護者の進学先に関する子どもへの期待と中学生の希望する学歴の回答のクロス集計表

		中学生							合計
		中学校	高校	大学・短大	大学院	専門学校	考えたことがない	わからない	
保護者	中学校	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校	I	17	9	0	4	2	1	34
	短大・高専	0	5	10	0	4	3	0	22
	大学	0	6	231	17	29	24	31	338
	大学院	0	0	1	I	0	0	0	2
	専門学校	0	3	2	0	16	0	2	23
	わからない	0	0	12	0	1	4	9	26
	合計	1	31	265	18	54	33	43	445

3) 保護者の「子どもとの関り」と小学生の「家族との関係」との対応

保護者の子どもとの関りの頻度と小学生の家族との関りの頻度との対応について、順位相関係数を算出した(表9)。その結果、保護者と小学生との回答には関連がみられ、層によって関連の違いはほとんどなかった。

表9 保護者の子どもとの関りの頻度と小学生の家族との関りの頻度との関連

	相対的貧困層	相対的低所得層	相対的高所得層
勉強を見る	.534 **	.521 **	.510 **
学校生活の話をする	.417 **	.400 **	.426 **
一緒に外出する	.520 **	.337 **	.356 **

** $p < .01$

4) 保護者の「子どもとの関り」と中学生の「家族との関係」との対応

保護者の子どもとの関りの頻度と中学生の家族との関りの頻度との対応について、順位相関係数を算出した（表 10）。その結果、保護者と中学生との回答には関連がみられ、層によって関連の違いはほとんどなかった。

表 10 保護者の子どもとの関りの頻度と中学生の家族との関りの頻度との関連

	相対的貧困層	相対的低所得層	相対的高所得層
勉強を見る	.416 **	.437 **	.472 **
学校生活の話をする	.430 **	.456 **	.495 **
一緒に外出する	.389 **	.414 **	.478 **

** $p < .01$

3.2. 親から子どもへの影響

次に、保護者から子どもへの影響を想定し、重回帰分析によって検討を行った。各質問項目について層別に検討し、それぞれにおいて影響が異なるかどうかに着目した。

1) 保護者の「子どもとの関り」から小学生の「学習理解」, 「授業外学習時間」への影響

小学生の学習理解（学校の勉強がよくわかるか）を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を尋ねる 6 項目を独立変数とした重回帰分析を行った（表 11）。相対的貧困層、相対的低所得層においては、特に親が子どもと学校の話をする頻度が、子どもの学習理解に正の影響を与えていた。相対的貧困層、相対的高所得層においては、親が子どもに宿題をするように注意する頻度が、子どもの学習理解に負の影響を与えていた。

表 11 小学生の学習理解を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
おじさんの勉強をみる	.017	.061	.027	-.015	.025	-.028	.045	.022	.083 *
おじさんが宿題をするように注意する	-.140	.057	-.225 *	-.036	.024	-.066	-.079	.018	-.169 **
おじさんと学校生活の話をする	.400	.112	.328 **	.217	.050	.198 **	.092	.043	.089 *
おじさんと一緒に料理をする	-.030	.079	-.036	-.035	.034	-.046	-.008	.028	-.011
おじさんと一緒に外出する	.010	.084	.012	-.031	.048	-.031	.046	.038	.049
おじさんと一緒にテレビをみる	-.173	.081	-.197 *	.026	.038	.031	-.051	.026	-.076
R^2			.167 **			.043 **			.047 **
n			117			518			677

* $p < .05$, ** $p < .01$

次に、小学生の授業外学習時間（学校の授業時間以外のふだんの 1 日あたりの学習時間：塾や家庭教師の時間を含む）を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を尋ねる 6 項目を独立変数とした重回帰分析を行った（表 12）。相対的高所得層においては、親が子どもの勉強をみる頻度が子どもの授業外学習時間に正の影響を、一方で、親が子どもと一緒にテレビをみる頻度が

子どもの授業外学習時間に負の影響を与えていた。

表 12 小学生の授業外学習時間を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
おじさんの勉強をみる	.101	.084	.120	.062	.039	.077	.191	.040	.196 **
おじさんが宿題をするように注意する	-.047	.076	-.060	-.026	.037	-.033	-.054	.033	-.063
おじさんと学校生活の話をする	.184	.153	.117	.121	.077	.073	.055	.077	.030
おじさんと一緒に料理をする	-.081	.106	-.076	.032	.053	.028	.049	.050	.040
おじさんと一緒に外出する	-.019	.116	-.016	.059	.073	.039	.096	.069	.056
おじさんと一緒にテレビをみる	-.177	.110	-.156	-.078	.059	-.060	-.152	.047	-.123 **
R^2	.047			.021			.066 **		
n	119			515			669		

** $p < .01$

2) 保護者の「子どもとの関り」から中学生の「学習理解」, 「学習時間」への影響

中学生の学習理解を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を尋ねる 6 項目を独立変数とした重回帰分析を行った (表 13)。相対的貧困層においては、特に親が子どもと学校の話をする頻度が、子どもの学習理解に正の影響を与えていた。相対的低所得層、相対的高所得層においては、親が子どもの勉強をみる頻度が子どもの学習理解に正の影響を、一方で、親が子どもに宿題をするように注意する頻度が子どもの学習理解に負の影響を与えていた。

表 13 中学生の学習理解を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
おじさんの勉強をみる	.122	.079	.158	.112	.044	.151 *	.068	.033	.110 *
おじさんが宿題をするように注意する	-.122	.065	-.192	-.069	.033	-.112 *	-.110	.025	-.220 **
おじさんと学校生活の話をする	.388	.092	.452 **	.077	.056	.076	.061	.047	.065
おじさんと一緒に料理をする	-.179	.103	-.188	-.038	.060	-.035	-.084	.045	-.091
おじさんと一緒に外出する	.064	.108	.064	-.024	.072	-.019	.008	.049	.009
おじさんと一緒にテレビをみる	-.100	.102	-.101	-.056	.052	-.058	-.015	.038	-.018
R^2	.189 **			.033			.052 **		
n	104			373			451		

* $p < .05$, ** $p < .01$

中学生の授業外学習時間を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を尋ねる 6 項目を独立変数とした重回帰分析を行った (表 14)。相対的低所得層、相対的高所得層においては、親が子どもの勉強をみる頻度が子どもの授業外学習時間に正の影響を与えていた。相対的貧困層においては、親が子どもと学校生活の話をする頻度が子どもの授業外学習時間に正の影響を、一方で、親が子どもと一緒にテレビをみる頻度が子どもの授業外学習時間に負の影響を与えていた。

表 14 中学生の授業外学習時間を従属変数、保護者の子どもに対する関りの頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層					
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β			
お子さんの勉強をみる	.220	.126	.184	.205	.062	.193 **	.196	.053	.196 **			
お子さんが宿題をするように注意する	-.127	.103	-.129	-.001	.046	-.001	-.014	.041	-.018			
お子さんと学校生活の話をする	.488	.146	.366 **	.010	.078	.007	-.040	.076	-.026			
お子さんと一緒に料理をする	-.099	.163	-.067	.098	.085	.063	.098	.073	.066			
お子さんと一緒に外出する	.160	.172	.103	.073	.101	.041	.050	.079	.032			
お子さんと一緒にテレビをみる	-.342	.162	-.223 *	-.024	.073	-.017	-.029	.062	-.022			
	R^2			.153 *			.057 **			.049 **		
	n			104			371			448		

* $p < .05$, ** $p < .01$

3) 保護者の「子どもへの期待と関心」から小学生の「学習理解」, 「授業外学習時間」への影響

小学生の学習理解を従属変数、保護者の子どもへの期待と関心を尋ねる8項目を独立変数とした重回帰分析を行った(表15)。相対的貧困層においては、親の子どもには家事やきょうだいの世話をしてほしいという期待が、子どもの学習理解に正の影響を与えていた。相対的低所得層においては、親の子どもには早く親元から独立してほしいという期待が、子どもの学習理解に負の影響を与えていた。相対的高所得層については、親の子どもには一生懸命勉強してほしい、子どもの教育にお金をかけた方がよいという期待が、子どもの学習理解に正の影響を与えていた。

表 15 小学生の学習理解を従属変数、保護者の子どもへの期待を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層					
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β			
学歴が低いと将来希望する職業につけない	.122	.128	.101	-.001	.045	-.001	.052	.039	.056			
他のことを我慢しても 子どもの教育にお金をかけた方がよい	-.007	.110	-.006	.061	.046	.063	.078	.036	.090 *			
勉強することで いろいろな考えを身に付けることができる	-.034	.137	-.026	.098	.060	.077	.084	.047	.073			
努力すれば夢や希望は実現する	-.149	.126	-.120	.052	.053	.044	.025	.045	.022			
子どもには一生懸命勉強してほしい	.045	.144	.035	-.086	.061	-.070	.126	.051	.106 *			
子どもには少しでも早く働いてほしい	-.056	.134	-.047	-.025	.050	-.025	-.038	.041	-.039			
子どもには早く親元から独立してほしい	-.041	.117	-.040	-.101	.045	-.114 *	-.048	.034	-.061			
子どもには家事やきょうだいの世話をしてほしい	.274	.101	.276 **	.000	.039	.000	-.041	.029	-.056			
	R^2			.074			.030 *			.070 **		
	n			120			526			690		

* $p < .05$, ** $p < .01$

小学生の授業外学習時間を従属変数、保護者の子どもへの期待と関心を尋ねる8項目を独立変数とした重回帰分析を行った(表16)。すべての層において、親の子どもの教育にお金をかけた方がよいという期待が、子どもの授業外学習時間に正の影響を与えていた。相対的低所得層においては、親の子どもには早く親元から独立してほしいという期待と子どもには家事やきょうだいの世話をしてほしいという期待が、子どもの授業外学習時間に負の影響を与えていた。

表 16 小学生の授業外学習時間を従属変数、保護者の子どもへの期待を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
学歴が低いと将来希望する職業につけない	-.220	.147	-.151	.036	.069	.025	.012	.070	.007
他のことを我慢しても 子どもの教育にお金をかけた方がよい	.363	.131	.271 **	.275	.069	.186 **	.259	.065	.168 **
勉強することで いろいろな考えを身に付けることができる	.265	.158	.170	-.044	.090	-.023	.104	.085	.051
努力すれば夢や希望は実現する	-.022	.144	-.015	.066	.080	.037	.071	.081	.034
子どもには一生懸命勉強してほしい	.163	.165	.104	.032	.091	.017	.181	.093	.084
子どもには少しでも早く働いてほしい	-.134	.155	-.093	.055	.076	.035	-.103	.074	-.059
子どもには早く親元から独立してほしい	.200	.135	.162	-.172	.067	-.127 *	-.071	.062	-.050
子どもには家事やきょうだいの世話をしてほしい	-.031	.119	-.026	-.127	.057	-.100 *	-.008	.052	-.006
R^2			.141 *			.071 **			.073 **
n			121			523			682

* $p < .05$, ** $p < .01$

4) 保護者の「子どもへの期待と関心」から中学生の「学習理解」, 「授業外学習時間」への影響
 中学生の学習理解を従属変数、保護者の子どもへの期待と関心を尋ねる 8 項目を独立変数とした重回帰分析を行った (表 17)。相対的貧困層においては、親の子どもには家事やきょうだいの世話をしてほしいという期待が、子どもの学習理解に正の影響を与えていた。相対的低所得層においては、親の勉強することでいろいろな考えを身に付けることができるという期待が子どもの学習理解に正の影響を、一方で、親の子どもには少しでも早く働いてほしいという期待が子どもの学習理解に負の影響を与えていた。

表 17 中学生の学習理解を従属変数、保護者の子どもへの期待を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
学歴が低いと将来希望する職業につけない	-.073	.129	-.066	-.063	.070	-.051	.010	.056	.009
他のことを我慢しても 子どもの教育にお金をかけた方がよい	.044	.125	.039	.068	.065	.058	.035	.055	.032
勉強することで いろいろな考えを身に付けることができる	.101	.148	.075	.195	.084	.125 *	.093	.070	.068
努力すれば夢や希望は実現する	.279	.145	.201	.031	.079	.021	-.022	.061	-.018
子どもには一生懸命勉強してほしい	-.026	.179	-.016	.108	.095	.064	.079	.073	.057
子どもには少しでも早く働いてほしい	-.147	.142	-.123	-.167	.073	-.133 *	-.064	.059	-.060
子どもには早く親元から独立してほしい	.126	.111	.128	.039	.065	.035	.075	.050	.083
子どもには家事やきょうだいの世話をしてほしい	-.246	.117	-.219 *	-.035	.053	-.035	-.036	.042	-.041
R^2			.166 *			.049 *			.020
n			105			378			463

* $p < .05$

中学生の授業外学習時間を従属変数、保護者の子どもへの期待と関心を尋ねる 8 項目を独立変数とした重回帰分析を行った。相対的低所得層においては、親の子どもへの教育にお金をかけた方がよいという期待が、子どもの授業外学習時間に正の影響を与えていた。

表 18 中学生の授業外学習時間を従属変数、保護者の子どもへの期待を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
学歴が低いと将来希望する職業につけない	.150	.212	.085	.061	.098	.034	.061	.090	.034
他のことを我慢しても 子どもの教育にお金をかけた方がよい	.064	.205	.036	.348	.092	.210 **	.093	.090	.052
勉強することで いろいろな考えを身に付けることができる	.145	.243	.069	.010	.119	.005	.154	.113	.070
努力すれば夢や希望は実現する	.413	.238	.189	-.106	.111	-.050	-.187	.099	-.092
子どもには一生懸命勉強してほしい	.030	.293	.012	.200	.134	.084	.108	.119	.048
子どもには少しでも早く働いてほしい	-.073	.233	-.039	.037	.103	.021	.019	.095	.011
子どもには早く親元から独立してほしい	.054	.183	.034	.006	.091	.004	-.097	.081	-.067
子どもには家事やきょうだいの世話をしてほしい	.272	.191	.153	.028	.074	.020	-.051	.069	-.036
	R^2		.102			.068 **			.025
	n		105			376			460

** $p < .01$

3.3 子どもの回答間の関連

子どもの質問項目に対する回答間の関連を、重回帰分析によって検討した。各質問項目について層別に検討し、それぞれにおいて影響が異なるかどうかに着目した。

1) 小学生の「各時間」と「学習理解」の関連

小学生の学習理解を従属変数、授業外学習時間、テレビ・ゲームの時間（ふだん1日あたりどのくらいの時間、テレビをみたりゲームをしたりするか）、携帯・スマホの利用時間（ふだん1日あたりどのくらいの時間、携帯電話やスマートフォンを使うか：タブレットなどを含む）を独立変数とした重回帰分析を行った（表19）。相対的低所得層、相対的高所得層において、授業外学習時間が学習理解に正の影響を与えていた。相対的貧困層、相対的高所得層においては、テレビ・ゲームの時間が学習理解に負の影響を、相対的低所得層においては、携帯・スマホ使用時間が学習理解に負の影響を与えていた。

表 19 小学生の学習理解を従属変数、各時間を立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層	相対的低所得層	相対的高所得層
授業外学習時間	.089	.216 **	.339 **
テレビ・ゲーム時間	-.223 *	-.059	-.081 *
携帯・スマホ使用時間	-.090	-.088 *	-.020
	R^2	.082 *	.066 **
			.138 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

2) 中学生の「各時間」と「学習理解」の関連

中学生の学習理解を従属変数、授業外学習時間、テレビ・ゲームの時間、携帯・スマホの利用時間を独立変数とした重回帰分析を行った。すべての層において、授業外学習時間が、学習理解に正の影響を与えていた（表20）。相対的低所得層、相対的高所得層においては、携帯・スマホ使用時間が、学習理解に負の影響を与えていた。

表 20 中学生の学習理解を従属変数、各時間を立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層	相対的低所得層	相対的高所得層
授業外学習時間	.299 **	.308 **	.096 *
テレビ・ゲーム時間	-.097	.003	-.093
携帯・スマホ使用時間	-.107	-.153 **	-.140 **
R^2	.147 **	.133 **	.047 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

3) 小学生の「家族との関係」と「学習理解」「授業外学習時間」の関連

小学生の学習理解を従属変数、家族との関りについての頻度を尋ねる 8 項目を独立変数とする重回帰分析を行った (表 21)。相対的貧困層、相対的低所得層においては、親に宿題をみてもらう頻度が、学習理解に負の影響を与えていた。相対的貧困層、相対的低所得層においては、親と学校や友だちのことについて話す頻度が、学習理解に正の影響を与えていた。

表 21 小学生の学習理解を従属変数、家族との関りについての頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
一緒に朝食を食べる	.056	.034	.148	.029	.018	.076	.028	.014	.080 *
一緒に夕食を食べる	-.004	.105	-.004	-.011	.038	-.013	-.015	.028	-.022
朝、起こしてもらう	-.052	.039	-.124	-.028	.016	-.079	-.002	.012	-.008
家の手伝いをする	.085	.042	.185 *	.018	.019	.045	.016	.015	.042
宿題 (勉強) をみてもらう	-.114	.038	-.271 **	-.053	.016	-.150 **	-.012	.013	-.038
学校や友だちのことについて話す	.105	.046	.211 *	.038	.019	.092 *	.031	.017	.074
一緒に図書館や美術館、博物館、コンサートなどに行く	-.013	.061	-.020	.086	.027	.150 **	.029	.021	.060
一緒に外出する (散歩する・買い物に出かけるなど)	-.064	.057	-.110	-.029	.026	-.051	.004	.022	.007
R^2			.203 **			.058 **			.022
n			115			527			679

* $p < .05$, ** $p < .01$

小学生の授業外学習時間を従属変数、家族との関りについての頻度を尋ねる 8 項目を独立変数とする重回帰分析を行った (表 22)。相対的貧困層においては、親に宿題をみてもらう頻度が、授業外学習時間に正の影響を与えていた。相対的低所得層、相対的高所得層においては、親と一緒に図書館や美術館などに行く頻度が、授業外学習時間に正の影響を与えていた。

表 22 小学生の授業外学習時間を従属変数、家族との関りについての頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
一緒に朝食を食べる	.038	.044	.082	.071	.027	.123 **	.040	.026	.062
一緒に夕食を食べる	-.013	.136	-.009	-.041	.058	-.033	-.183	.050	-.145 **
朝、起こしてもらおう	-.026	.049	-.052	-.021	.024	-.037	.006	.022	.010
家の手伝いをする	.093	.054	.169	.003	.029	.004	.010	.027	.015
宿題（勉強）をみてもらおう	.104	.050	.204 *	.019	.025	.035	.034	.023	.060
学校や友だちのことについて話す	-.014	.060	-.023	.010	.030	.016	.054	.031	.071
一緒に図書館や美術館、博物館、コンサートなどに行く	-.034	.079	-.043	.112	.042	.129 **	.128	.037	.145 **
一緒に外出する (散歩する・買い物に出かけるなど)	-.063	.073	-.090	.014	.040	.017	-.053	.040	-.055
	R^2		.080			.043 **			.055 **
	n		117			526			673

* $p < .05$, ** $p < .01$

4) 中学生の「家族との関係」と「学習理解」「授業外学習時間」の関連

中学生の授業外学習時間を従属変数、家族との関りについての頻度を尋ねる 8 項目を独立変数とする重回帰分析を行った (表 23)。相対的低所得層、相対的高所得層においては、親と学校や友だちのことについて話す頻度が、学習理解に正の影響を与えていた。相対的高所得層においては、親と一緒に朝食を食べる頻度、親と一緒に図書館や美術館に行く頻度が、学習理解に正の影響を与えていた。

表 23 中学生の学習理解を従属変数、家族との関りについての頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
一緒に朝食を食べる	.034	.044	.083	.033	.022	.085	.043	.018	.122 *
一緒に夕食を食べる	.064	.071	.090	.027	.044	.035	-.043	.034	-.063
朝、起こしてもらおう	.015	.047	.035	-.002	.021	-.004	-.039	.017	-.110 *
家の手伝いをする	-.031	.049	-.065	.011	.026	.023	.015	.019	.038
宿題（勉強）をみてもらおう	-.098	.080	-.128	-.001	.034	-.002	-.006	.027	-.012
学校や友だちのことについて話す	.100	.056	.194	.068	.029	.132 *	.042	.021	.100 *
一緒に図書館や美術館、博物館、コンサートなどに行く	.185	.099	.196	.034	.043	.048	.075	.038	.099 *
一緒に外出する (散歩する・買い物に出かけるなど)	.000	.072	.000	-.061	.040	-.091	-.075	.034	-.111 *
	R^2		.122			.036			.050 **
	n		108			378			461

* $p < .05$, ** $p < .01$

中学生の授業外学習時間を従属変数、家族との関りについての頻度を尋ねる 8 項目を独立変数とする重回帰分析を行った (表 24)。相対的貧困層においては、家の手伝いをする頻度が授業外学習時間に正の影響を与えていた。相対的高所得層においては、親と一緒に図書館や美術館に行く頻度が、授業外学習時間に正の影響を与えていた。

表 24 中学生の授業外学習時間を従属変数、家族との関りについての頻度を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
一緒に朝食を食べる	.089	.068	.140	.044	.032	.079	-.019	.029	.034
一緒に夕食を食べる	-.036	.111	-.033	.024	.062	.022	-.067	.056	-.060
朝、起こしてもらおう	-.055	.074	-.080	.012	.031	.020	-.016	.027	-.029
家の手伝いをする	.156	.076	.207 *	.026	.037	.039	.015	.032	.023
宿題（勉強）をみてもらおう	-.059	.124	-.050	.070	.049	.079	.078	.044	.088
学校や友だちのことについて話す	.153	.087	.190	.015	.041	.020	.021	.035	.030
一緒に図書館や美術館、博物館、コンサートなどに行く	.145	.154	.099	-.017	.061	-.016	.194	.062	.156 **
一緒に外出する (散歩する・買い物に出かけるなど)	-.094	.112	-.086	.089	.058	.092	-.037	.055	-.033
	R^2		.129			.039			.045 **
	n		108			377			459

* $p < .05$, ** $p < .01$

5) 小学生の「自己肯定感」と「学習理解」「授業外学習時間」の関連

小学生の学習理解を従属変数、自己肯定感を尋ねる6項目を独立変数とした重回帰分析を行った(表25)。相対的貧困層においては、自分は友だちから好かれているという感覚が、学習理解に正の影響を与えていた。相対的低所得層においては、自分にはよいところがあるという感覚が、学習理解に正の影響を与えていた。相対的高所得層においては、自分にはよいところがあるという感覚とがんばればよいところがあるという感覚が、学習理解に正の影響を与えていた。

表 25 小学生の学習理解を従属変数、自己肯定感を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
自分にはよいところがある	-.013	.123	-.012	.125	.049	.135 *	.114	.037	.145 **
自分には将来の夢や目標がある	.132	.113	.113	.017	.039	.019	.026	.031	.034
がんばれば、いいところがある	.006	.122	.006	.045	.052	.044	.111	.041	.122 **
家族は自分を大切にしてくれている	-.004	.164	-.002	.110	.067	.088	.076	.053	.061
自分は友だちから好かれている	.250	.115	.222 *	.047	.044	.053	.031	.038	.037
大人は信用できる	.001	.092	.001	.087	.046	.097	-.026	.035	-.032
	R^2		.072			.094 **			.079 **
	n		119			522			684

* $p < .05$, ** $p < .01$

小学生の授業外学習時間を従属変数、自己肯定感を尋ねる6項目を独立変数とした重回帰分析を行った(表26)。相対的高所得層において、自分には将来の夢や目標があるという感覚が、授業外学習時間に正の影響を与えていた。

表 26 小学生の授業外学習時間を従属変数、自己肯定感を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
自分にはよいところがある	.035	.151	.025	.110	.078	.078	.048	.070	.034
自分には将来の夢や目標がある	.110	.138	.077	.063	.062	.046	.154	.060	.107 *
がんばれば、いいことがある	-.089	.149	-.066	.113	.083	.073	.055	.078	.033
家族は自分を大切にしてくれている	-.229	.201	-.113	.065	.106	.034	-.131	.101	-.058
自分は友だちから好かれている	.204	.143	.145	-.064	.069	-.049	.019	.072	.013
大人は信用できる	.108	.112	.096	-.089	.073	-.066	.032	.067	.022
	R^2		.044			.019			.019 *
	n		120			519			677

* $p < .05$

6) 中学生の「自己肯定感」と「学習理解」「授業外学習時間」の関連

中学生の学習理解を従属変数、自己肯定感を尋ねる6項目を独立変数とした重回帰分析を行った(表27)。相対的低所得層においては、自分は友だちから好かれているという感覚、自分には将来の夢や目標があるという感覚、家族は自分を大切にしてくれているという感覚が、学習理解に正の影響を与えていた。相対的高所得層においては、家族は自分を大切にしてくれているという感覚が、学習理解に正の影響を与えていた。

表 27 中学生の学習理解を従属変数、自己肯定感を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
自分にはよいところがある	.259	.133	.246	.029	.065	.028	.029	.051	.033
自分には将来の夢や目標がある	-.020	.099	-.021	.146	.050	.157 **	-.006	.038	-.007
がんばれば、いいことがある	-.094	.133	-.089	-.032	.067	-.030	.000	.053	.000
家族は自分を大切にしてくれている	-.004	.179	-.003	.193	.083	.137 *	.185	.064	.167 **
自分は友だちから好かれている	.149	.159	.125	.186	.071	.164 **	.106	.060	.104
大人は信用できる	.022	.105	.022	.053	.059	.055	.074	.050	.083
	R^2		.091			.131 **			.092 **
	n		106			382			459

* $p < .05$, ** $p < .01$

中学生の授業外学習時間を従属変数、自己肯定感を尋ねる6項目を独立変数とした重回帰分析を行った(表28)。相対的低所得層においては、大人は信用できるという感覚が、授業外学習時間に正の影響を与えていた。相対的高所得層においては、がんばればいいことがあるという感覚、自分には将来の夢や目標があるという感覚が、授業外学習時間に正の影響を与えていた。

表 28 中学生の授業外学習時間を従属変数、自己肯定感を独立変数とした重回帰分析結果

	相対的貧困層			相対的低所得層			相対的高所得層		
	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β
自分にはよいところがある	.090	.210	.054	-.007	.095	-.005	-.071	.086	-.051
自分には将来の夢や目標がある	.288	.156	.194	.053	.074	.040	.156	.064	.124 *
がんばれば、いいことがある	.106	.211	.064	.146	.098	.098	.210	.090	.150 *
家族は自分を大切にしてくれている	-.185	.283	-.072	-.065	.121	-.033	-.017	.107	-.010
自分は友だちから好かれている	.118	.251	.064	.004	.104	.002	-.053	.101	-.032
大人は信用できる	-.004	.167	-.003	.301	.087	.216 **	-.108	.084	-.074
	R^2						.078 **		
	n						380		
							456		

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考 察

貧困が子どもたちに与える影響を明らかにするため、相対的貧困層、相対的低所得層、相対的高所得層の3群に区分して統計解析を行った。その結果、これまでに行われてきた分析の観点である相対的貧困層とその他という2区分以上に、相対的貧困層に属する保護者と子どもたちの状況が明らかになった。しかしこの考察は、多岐に渡るため本研究では、3群間での保護者—子どもとの関連性に注目して結果を示した。そこで明らかになった傾向と、その傾向から考える改善方策について以下に述べることとする。

まず、希望する進路に関する回答については、小学生と中学生の両方において、相対的貧困層の保護者と子どもとの間に対応が見られなかった。一方で、相対的低所得層や相対的高所得層においては、保護者と子どもとの回答に対応が見られた。つまり、相対的貧困層においては、将来の進路について保護者と子どもが他の区分に比べて話をしていない可能性が示された。学習の動機づけの要因として、現在行っている学習が自らの将来の希望の実現に役立つかどうかがある(e.g., 解良・中谷 2019)。もし相対的貧困層の子どもたちが、その動機づけを持たないならば、学習に消極的になるという結果をもたらす危険性がある。この点に関しては、家庭にこの動機づけの強化を求めることよりも、学校でその動機づけを高める取り組みを行うことが効果的な改善方法になると考えられる。

次に「勉強を見る」「学校生活の話をする」「一緒に外出する」といった、関りの頻度については、小学生と中学生の両方において、保護者と子どもとの回答に対応が見られた。こういった客観的な事実に基づく回答については、各層に関わらず、保護者と子どもとの認識が一致していることが分かる。この結果は、貧困が家族関係にひずみをもたらすのではないかという仮説を覆すものである。相対的貧困層にあっても良好な親子関係が維持されており、この良好な関係を維持・増進する支援が望まれる。

次に、保護者の子どもとの関りから子どもの学習理解について、相対的高所得層では、親が子どもの勉強をみるのが、子どもの学習理解につながっていた。「尼崎調査」において、相対的貧困層の保護者は、それ以外の保護者よりも学歴が低いことが示されている。つまり、相対的高

所得層の保護者は比較的学歴が高いと考えられるため、よりの確な家庭での教育が行われた可能性がある。また、相対的貧困層と相対的高所得層では、宿題をするように保護者が子どもに注意することと、子どもの学習理解との間に負の関連が見られた。これは、外発的な注意をすることで、学習への内発的な動機づけが低下し、学習への取り組みを阻害している可能性が考えられる。経済状況に大きな差のある二群間で同様の傾向がみられたことに関しては、相対的高所得層ではより高い学業達成を求めて学習への注意喚起が行われ、相対的貧困層では、学業不振を原因とする注意喚起が行われている可能性がある。特に学業不振の状態にある中学生に、中学校の学習内容を適切に理解させる指導を家庭で行うことは保護者の力を超えているといえる。結果的に、抽象的な叱責という学習意欲に負の影響を与える事態を作り出している危険性が高い。しかし、相対的貧困層においては、小学生と中学生の両方で、保護者が子どもと学校の話をするのが、子どもの学習理解につながっていた。それゆえ、保護者がこれまで以上に、子どもの学習支援を行うという直線的な解決策ではなく、学校が、経済的な負担を保護者に与えることなく、保護者が子どもの学校生活に興味をもつような取組みを構築すること、また学童保育育、学校ボランティアなどの既存の仕組みをさらに積極的に活用した学校主体の学業不振への取組みを推進することがこの課題の改善に効果を持つと考える。

次に、子どもの自己肯定感と学習理解や学習時間との関連においても、層によって違いが見られた。相対的低所得層と相対的高所得層では、「自分にはよいところがある」「自分には将来の夢や目標がある」「がんばればいいことがある」「家族は自分を大切にしてくれている」という気持ちがあり、学習理解や学習時間を促進させる可能性が示された。一方で、相対的貧困層においては、こういった関連がほとんど見られなかった。「尼崎調査」では、相対的貧困層の子どもとそれ以外の子どもでは、自己肯定感の高さ自体は変わらないことが示されている。このことから推測されるのは相対的貧困層の子どもたちの自己肯定感は、学業達成とは異なった要因によって成り立っているということである。しかし、より高い知力を身に付けることは子どもたちの未来を切り開く強力なツールである。逆にそのツールを持たなければ、社会生活上、厳しい状況に陥る危険性は高い。この負の連鎖を断ち切るため、「学習すること」をその要因として持つ自己肯定感を育成することが必要である。そしてこのような取組みを行うことができる主体は学校であり、自治体には、その取組みを実現するための支援が望まれる。

参考文献

尼崎市（2018）「尼崎市子どもの生活に関する実態調査結果報告書」

http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/shisei/si_kangae/kodomo_sesaku/1010963.html（2019年9月25日アクセス）

大阪府（2017）「大阪府子どもの生活に関する実態調査」

<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/28281/00000000/01jittaityosahoukokousyo.pdf>（2019年10月

30日アクセス)

沖縄県 (2015) 「沖縄県子どもの貧困実態調査」(概要版)

<https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/kodomotyosa/documents/okinawakodomotyousagaiyouban.pdf> (2019年10月31日アクセス)

川西市 (2017) 「川西市子どもの生活に関するアンケート調査報告書」

https://www.city.kawanishi.hyogo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/001/144/houkokusyozentai.pdf (2019年10月31日アクセス)

解良優基・中谷素之 (2019) 「課題価値のもつ概念的特徴の分析と近年の研究動向の概観」アカデミア. 人文・自然科学編, 17, pp. 95-116.

京都府 (2017) 「京都府子どもの貧困対策の推進に係る調査研究 報告書(概要版)」

https://www.kpu.ac.jp/cmsfiles/contents/0000005/5749/kodomonohinkon_houkoku.pdf#search=%27%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%BA%9C+%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E3%81%AE%E8%B2%A7%E5%9B%B0+%E5%AE%9F%E6%85%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%27 (2019年10月31日アクセス)

内閣府 「子どもの貧困対策 実態調査の調査項目の具体的事例」

https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/torikumi/koufukin/chousa_jirei.html (2019年10月31日アクセス)

西宮市 (2017) 「西宮市子育て世代の経済状況と生活実態調査報告書」

<https://www.nishi.or.jp/kosodate/kosodate/shisakujo/sonota/keizaijokyo.html> (2019年11月1日アクセス)

北海道保健福祉部・北海道大学大学院教育学研究院子どもの生活実態調査研究班 (2017) 「北海道子どもの生活実態調査結果報告書」

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/kms/hinkon/houkokusho/00_hyoushi.pdf (2019年9月25日アクセス)

